

第13回 林道てくてく 宮下林道



相模灘を見て、林道を歩き、巨木を訪ねる [湯河原町地内]

第13回「林道てくてく」は、県西部の宮下林道を相模灘や真鶴半島等の眺望を楽しみながら歩く。

コースは、湯河原駅—(バス)—バス停「しとどの窟」—城山—宮下林道—五所神社—成願寺—湯河原駅 とした。

距離は、およそ7 km。ほとんど下りだけの楽なコースだが、絶景を堪能するために、晴の日を選んで歩くことをおすすめする。

湯河原駅から箱根行きのバスに35分ほど揺られ、バス停「しとどの窟(いわや)」で降りる。ここにはトイレのある建物もある。

稜線方向に向かう左手の緩い上りの舗装された道路に行く。



ここからは、右の千歳川と左の新崎川には挟まれた尾根の道。

かつて、この二つの川は、下流で合流し相模湾にそそいでいたが、

水田開発のため小田原藩時代に分流された。今、水田の面影はない。

道の右手はるか下にはミズキやウツギ等の木々の間に千歳川に沿った温泉街が見える。

舗装道路の終点からはヒノキ林の中の鉄平石を敷いた石畳の山道が少し続き、下りの山道になると木間越しに相模の海原と海に突き出た真鶴半島が見えてくる。

バス停から1.5 km程で標高563 mの城山に着く。ここは土肥城址といわれ、立派な石碑もある芝生の広場となっている。

ここからは、絶景の言葉にふさわしい雄大な眺めが眼前に広がる。

右手には天城の山々、そして、その先の海原に浮かぶ伊豆大島や三宅島などの島々、左手には江の島や房総半島の山並みも見える。

景色をごちそうに加え、ゆっくりと昼食とするには最高の場所。

腰をあげ10数分も下ると芝生の広場やバイオトイレのあるピクニック広場となる。湯河原の市街地や海が大きく迫ってきた。

海に泳ぎ出ると大蛇のような形をした真鶴半島が大きく見える。

こういって、半島の名は鶴のイメージから、という説もあるのでお叱りを受けるかもしれないが。



真鶴半島

半島は長さ約3 km。最大標高約90 m。周囲は浸食により断崖の所が多く浜は少ない。周辺は古くからの好漁場となっている。

半島の成立は、箱根火山の溶岩流出によるものでなく、幕山のような溶岩ドームが重なってできたと考えられている。

半島最大の売り物は「お林」と呼ばれる半島先端部を占める森林である。300年生ともいわれる松に加えクスノキ、スダジイなどの原生林状を呈した巨木の林立する森林である。原生林状とはいつでも、崖地を除いては、ほとんどがかつて人の手が入っており、小田原藩は3年かけて15万本の松を植林したとのことである。

折を見て、長い年月が作りだした森林の奥深さを味わっていただきたい。

宮下林道

広場の下からは林道となる。左に行けば城堀林道、右に行けば、これから歩く宮下林道。

宮下林道は、延長約2.5 km、幅員3 mの舗装された道。周囲は手入れされたヒノキ林。ヘアピンカーブを所々に交えながら山肌に沿ってつくられている。

展望はきかないが、林立するヒノキの木立が心地よい。山肌からの湧水や溶岩の大きな転石、そして、治山の山腹工事や間伐した個所なども見ることができる。





林道を下り始めて50分ほどで集落となる。三叉路を左手に進み、ホテルの前を過ぎ、新幹線脇の広い通りに出る。この道を右手に下ると巨木のある五所神社。

五所神社と明神の楠

五所神社は土肥郷の総鎮守で、社伝によると今から約1350年前の天智天皇時代の創建とされ、県の重要文化財指定の本殿や宝物として、頼朝旗揚げを助けた土肥実平が奉納した太刀などがある。

長い歴史のある神社の証として、県の名木百選に選ばれたクスノキやイチョウの巨木がある。

圧巻は道の反対側、かつての参道わきにある「明神の楠」。

樹高はそれほどではないが、大地を捉える張り出した根はごつごつと力強く、木の生命力のたくましさあらわにしている。その根回りは、15.6mとすさまじく、県下でも有数の太さである。



成願寺のビャクシン

次の巨木は、成願寺のビャクシンをみる。五所神社から線路に沿って15分ほどの所にある。

ビャクシンの特徴であるねじれて立ち上がる幹はそのまま枝となり、力強さに溢れる木で国の天然記念物に指定されているのもうなずける。樹高20m、幹回り6mで樹齢は800年とのこと。



そして、ここから湯河原駅への道筋にある八幡神社には、樹齢600年のクスノキの巨木もある。

数百年を経た巨木は力強く、霊力のようなものを感じさせる。

ここから湯河原駅は指呼の距離。およそ5時間半のゆったりとした楽しい「てくてく」であった。

森林と土壌

森林の働きとして、木材生産のほか水源涵養や二酸化炭素の吸収、生活や景観保全などが思い浮かぶ。

だが、これらの働きの基盤ともいべき「土壌」の生成と維持について語られることは少ない。

このことに森林が果たしている役割は改めていうまでもない。

土壌は、岩石の風化物と植物の落葉落枝（リター）や動物遺骸等の有機物、それに土壌生物がかかわって長い年月をかけてつくられる。

土壌生物は、あまりなじみがないが、明治神宮の森では、片足の下に線虫などの微小生物が8万匹余生息し、バクテリアの数を数えると想像をはるかに超える。

また、菌根菌や根粒菌などは、樹木と共生しながら森づくりに深

くかかわっている。

土壌の生成量は気候等により地域差はある。土壌流出がないとしても年1mmの厚さに満たない。

森林と川や海の生き物

真鶴半島の森林35haは県内唯一の魚付き保安林として守られている。今、魚付き林が水産資源増加の面から再評価されている。

森林は土砂の流出を軽減し、リターは土の生成物となるだけでなく、地上や水中動物、バクテリアの餌となり、そして、森林の土から流れ出る水には、生命の誕生や維持に欠かせない窒素やリン等の栄養塩が含まれている。

この栄養塩が藻類をはぐくみ、植物プランクトンを増殖し、結果として動物プランクトン、魚と続く食物連鎖の環が拡大する。豊かな森林が豊かな海をつくることになる。

さいごに

林道てくてくは、今回を持って終わります。日帰り・公共交通機関利用・見所ありを3つの条件として林道を選択してきた。この条件を満たすために、地域的な偏りができたことはお許し願いたい。

県内の森林は、けして広くはないが、海岸から山地と変化に富んでおり、大地も火山、隆起、衝突と多様である。そして、歴史と文化にあふれた地域が身近な所に多いことに私自身も気づかされた。

林道は、森林づくりの道。そのため、車両の交通が規制されている路線も多いが、歩いて通る分には何の支障もない。

山づくりにかかわる人達の汗にも思いをはせ、また、再生可能な木材資源の利用と森林文化の復活等も頭の隅に入れながら、森の生気を胸一杯に吸い込んで、林道歩きをお楽しみいただきたい。

(2012. 3末 瀧澤)